

# 全国市街地の変遷

## 昭和の記憶から次代へ

### 45番目に市制施行

「変化」をキーワードに四日市市をとりあげたい。古くは東海道五十三次の43番目の宿場町として栄えた四日市市は、三重県の北部に位置する県下最大の都市で、1897年に全国で45番目に市制を施行した。今年はその20周年にあたる年で、各種イベントが

企画されている。工業都市としてつとに有名だが、特にその名を全国的なものとしたのは公害問題だろう。明治時代には紡績や製油、その後紡績産業が発達、戦時下では軍需工業も盛んとな

り、終戦後は石油化学コンビナートが建設され、市の産業の中心となる。コンビナートの稼働に伴い、大気汚染・水質汚濁の問題が発生、特にぜんそく症状を訴える人々が

増え、後に「四日市ぜんそく」といわれる公害病として社会問題化することとなる。1967年住民による裁判が提起され、その動向が全国的に注目されるに至り、市民・企業・行政が一体となって環

境改善への取り組みを始め、76年にはぜんそくの主な原因とされる二酸化硫黄濃度が国の基準を市内全域でクリアするなど、大幅な環境改善に成功している。

2015年には近鉄四日市駅近くに、同じ建物内に博物館・プラネタリウムと併設される形で「四日市公害と環境未来館」が開館した。四日市公害を教訓に得た知識や環境技術を、広く情報発信する目

## 臨海部中心から内陸部の先端型産業へ

# 公害教訓に環境技術発信

的で建設されたものである。なお、このプラネタリウムは「最も多くの星を投影するプラネタリウム」として、ギネス世界記録に認定されている。

環境について大きな変化をなし得た四日市市だが、工業都市として性格にも変化がみえる。工業の中心は石油化学コンビナートのある臨海部だが、現在では内陸部も工場が

多く建設され、主に加工組立、高度先端技術、物流などを担う施設が広域に立地している。今話題の東芝メモリの製造拠点は四日市市にあるが、これも海からはや離れた場所にある。

このような変化に連動し

て、産業構造にも変化がみられる。産業別の製造品出荷額等は、以前は1位、2位を化学工業と石油・石炭製品の製造業が占めていたが、最近では石油・石炭製品の製造業を抜いて電子部品・デバイス等製造業が2位となっており、臨海部から内陸部への動きを反映する形となっている。

### 日本五大工場夜景に

なお、臨海部の工業エリアは、産業構造の変化とは関係ないが、近年工場夜景の美しさで四日市はその名を馳せている。川崎市観光協会によると、「日本五大工場夜景」に四日市が入るそうだ（他は当然の川崎と室蘭、北九州、周南）。夜景の撮影スポットを紹介するウェブサイトは多数あり、夜景クルーズなるものも登場している。

最後に街並みの変化について触れると、全国的な傾向だと思いが、主要駅周辺の大型店舗が撤退し、跡地にマンションが建つという光景が四日市市でもみられる。

駅前の一等地の旧ジャスコ跡地（ジャスコの前身、岡田屋創業の地）は高層マンションが建設され、地元の耳目をひいた。時代の流れを感じる変化である。

（日本不動産研究所津支所、不動産鑑定士・佐藤康範）

## 三重県四日市市・変化を続ける工業都市



④四日市の代名詞でもある石油化学コンビナート ⑤博物館・プラネタリウムと同じ建物にある「四日市郊外と環境未来館」